

自分で気付き、考え、行動する児童を目指して
第2学年 生活科単元「うごく うごく わたしのおもちゃ」

唐津市立外町小学校 教諭 大久保 司

1 本研究の主張点

本単元は、児童の身の回りにあるものを使って動くおもちゃを作る活動である。友達と同じようにおもちゃを作っているつもりでも、自分のものとは異なる動きをする。そこから、児童の中には、「どうして?」「もっと〇〇のようにしたい。」という思いが生まれ、試行錯誤を繰り返しながらおもちゃに修正を加えていくと考える。

そこで本研究では、自分の理想のおもちゃ（どのような動きをしてほしいか）はどのようなものかを考えさせた。そして、友達のおもちゃと自分のおもちゃの構造の違いや、操作方法の違いなどに目を付けて比較させることで、おもちゃの動き方の違いの要因がどこにあるのかを考えられるようにした。そして、自分の考えをもとに修正を加えることで、自分の理想とするおもちゃに近づけることができるようにした。そうすることで、児童が自分で考え自分で作り上げたという達成感を味わうことができ、3年生から始まる理科学習においても、事象を比較しながら学習を進めることができるようになっていくのではないかと考え実践を行った。

2 単元計画（全12時間）

次	時	主な学習活動
1	1, 2, 3	動くおもちゃを作ろう
2	4, 5	楽しく遊べるように、おもちゃの工夫をしよう。(本時)
3	6, 7, 8, 9, 10	遊び方を工夫しよう。
4	11, 12	1年生と一緒に遊ぼう。

3 本時の目標

- ・自分のおもちゃと友達のおもちゃとの構造や操作方法の違いを見つけ、自分の理想のおもちゃにするための方法を考える。

4 授業の実際（4, 5/12）

児童の学習活動や主な反応	具体的な指導及び留意点
1, 前時の学習を振り返り、本時の見通しを持つ。 ・もっと高く跳ぶようにしたい。 ・もっと遠くまで進むようにしたい。	・前時におもちゃで遊び、自分のおもちゃをどのようにしたいか考えたことを振り返り、考えたことを数人に発表させる。
おもちゃをくらべて、自分のおもちゃをレベルアップさせよう！	
・あれ、右の方が高く跳んだよ。何か違うところがあるのかな？ ・ゴムが違うのかな？	・「パッチンガエル」を二つ準備し、跳び方が違う様子を見せる。どうして跳び方が違うのかを考えさせることで、本時の見通しを持つことができるようにする。 ・構造に違いがあることを伝え、構造を工夫すれば、自分の理想のおもちゃに近づけることができるということを伝える。

2, 友達と一緒に遊び、違うところを見つける。



3, 理想のおもちゃに近づける方法を考える。

- ・〇〇くんのように、カメをたくさん引っ張れば遠くに行くみたいだ。
- ・今のパッチングエルより少し小さくしたら、軽くなって跳びやすくなるかな…。

・友達と一緒に遊ぶことで、友達のおもちゃと自分のおもちゃの構造や、操作方法の違いを見つけることができるようにする。

・操作方法の違いについては、一緒に遊んでいるときに試してもよいようにする。

・友達のおもちゃとの違いをもとに、自分のおもちゃの構造や操作方法にどのような修正を加えればよいかを考えさせる。

・うまく考えられない児童もいるため、自分で考えさせた後に、同じおもちゃの友達と一緒に考える時間を設定する。

4, 考えたことを実践する。



5, 学習の振り返りをする。

はじめにつくったやつよりも小さくしたら
たくさんぶよようになったからうれしか
です。

・考えた方法でおもちゃを作り直したり、操作方法を変えたりして遊んでよいようにする。

・できるだけ自分の理想のおもちゃに近づくように、時間が来るまでは何度も挑戦してよいようにする。

・作り直したり操作方法を変えたりしたことで、理想のおもちゃに近づいたかどうか振り返りを書かせる。

5 考察

本学級の児童は、困ったことや難しいことに直面すると、すぐに人に頼ったり、そこで諦めてしまったりすることが多い。しかし、今回の実践では、おもちゃ作りという楽しい単元であるため、最後までとても意欲的に活動することができた児童が多かった。友達のおもちゃと比較して違いを見つけたり方法を考えたりする活動についても、途中で諦めたりせずに自分で考えようとしている児童が多かった。友達のおもちゃより遠くまで動かしたい、高く跳ばしたいというような思いを、自分の力で実現させようという気持ちが強かったためはないかと考える。

友達とのおもちゃの違いについては、「〇〇くんのカエルの方が幅が小さい」や「カメの引っ張り方が違う」など、動きの違いの要因についての記述が多かった。しかし、「ゴムの色が違う」や「絵が違う」など、要因とは異なる気づきを記述している児童もいた。

今回のような授業を仕組みなくとも、自分で違いに目をつけ改善していく児童はいるはずである。しかし、意図的に仕組みたことで、違いに目を付け自分で改善方法を考えられた児童も多かった。本実戦で経験した違いに目を付ける活動が、来年度からの理科の学習に少しでも活かされればと考える。